

---

# そんなのありますか？

高遠 陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そんなのありですか？

### 【Zコード】

N3261BA

### 【作者名】

高遠 陽

### 【あらすじ】

いきなり腕を掴まれて「好み」だなんて、誰が信じるっていいのかな。

それでも私の好みを知り尽くしたように攻めてくる彼に翻弄されて……。

## いきなりですか

1.

翌日には休日を控え、浮かれて騒ぐ空気が充満している金曜日の夜。気の抜けない友人 伊藤 千紘ちひろとわたしこと八重野 環花子わかこが気を抜けない話でけん制をしながら盛り上がり上がって飲んでいた居酒屋の暖簾をくぐつて外の出たその瞬間、いきなり手を掴まれた。

目の前には、なぜかスーツのグレーのヘンリボーン。

呆然として顔を上げると、そのスーツの持主は照れた笑いを私に向けつつ、名刺を一枚差し出した。

『居酒屋 チューン 山木屋 統括本部長 山木 淶』

今出てきたばかりの居酒屋の名前が書かれた名刺だった。まじまじと名刺を見て、そのままその名刺を持つている手を見ると、意外と線の細い、労働なんて知らないと言っているような手があつた。

「好みなんです」

その細い手とは裏腹に、低く重みのある声が頭の上から降ってきた。

驚いた。

本当に驚いた。

居酒屋の一番忙しい時間帯には相応しくないスーツ姿で、そして軟そうな（と言つては失礼なんだろうけれど）、擦れていらない表情かおを柔らかそうな長めの前髪で隠すように私をじっと見下ろしていた。

「え……つと？」

「店にいるときからすゞく好みの子がいるなって思つたんだけど、全然目線が合わないから追いかけてきました」

「環花子。先、帰るね」

私の横でくすくす笑いながら千紘が私の肩にぽんと手を置いた。

「えええっ！？ちよつと待つてよ、千紘！」

「たまにはナンパされなさいよ」

「いやっ！？これつてぜつたい千紘の間違いでしょ！…」

確かによく一人で飲んでいるとナンパはされてきたけれど、それは大抵千紘が受けることで私ではない。

特出しているところは168cmの身長くらいという平平凡凡な私は違う、千紘は女の私から見てもかなりの美人だ。

豊かな栗色の髪はうねつて背中まで届いているし、大きなヘーゼルの瞳が黒い淵に覆われてそれは魅惑的。鼻筋も通つて横顔はまるで絵に描いたみたいで、唇は今キスをし終わつたみたいにぷつくり膨れて魅惑的に輝いている。身長は160cmにちよつと届かないけれどしているところは出でて引つ込んでいるところは引っ込んでいるという、羨ましい限りの体型だ。

そんな千紘と一緒にいれば大抵ナンパにあつてしまふので、この男も店から出て行く私たちにあわてて、間違えて私の手を掴んだに過ぎないに決まってる。

「いえ、私はあなたが好みなんです」

決して細くはない一の腕を掴んだまま、恥ずかしげもなくそんな言葉をいう。

「環花子を見染めるなんて、久しぶりに人を見る田のある人だわー。」  
「安心して私は帰るね」

「ちよっとおおおおつー逃げるなつ！」

「山木 漣さん？あまりうしねの子、いじめないでね。……名前割れでんだし」

「善処しますが」

「ふふ。よろしく。じゃあ、また月曜にねー」

「千紘おつー!？」

千紘を捕まえようとしたばたとしても、腕は男に掴まれたままで動きようがなく、見る見る千紘は闇に隠れて見えなくなつていぐ。とつとう角を曲がつて私の視界から消えると同時に、もう一度くるふと身体の向きを変えさせられた。

「わかこ、さん?名前、ありますよね  
「いやいやいやいや。違いますからつー！」  
「でも彼女はそう呼んでいましたよ?」

ええ、そりゃあもちろん、本名ですからね。  
けれどもその男は私の単純な嘘なんてお見通しだった。

「どういった字を書かれるのか、興味ありますね  
「…………どうして私がそれをあなたに教えると?」  
「だって、私はあなたと付き合いたいと願つてるので、そのへりいの情報を頂いてもいいと思つますよ」

その時携帯のバイブが肩にかけていた鞄から振動してきた。

「「「めんなさい」と一言断つて、あわてて携帯を探つて電話に出ると、相手は千紘からだった。

『やほー。うまくいってん?』

「何よそれ。いくわけないでしょ」

『ふふ。あのね、その人の身元、インターネットで検索したらちゃんと[写真付きで確認されたからね。安心してナンパされなさいよー?』

ツーシーツー

千紘……。恐ろしいトト。

切れた電話をまじまじと見てると、件の男<sup>ひと</sup>が田の前に立ちはだかって私の手首を捕まえて、スタスターと断りもなしに歩き始めた。

「あー……あのっ! 手を離してください!」

「金曜の夜ですよ? 人ごみにまぎれて見失つのも嫌ですから、手をつないでいたほうがよいでしょう?」

「ここには歩いている人なんて私たちくらいしかいません……」

「あー。まあ、そんな感じですけどね」

どんな感じだ、どんな。

どこに行きたいところもあるのか、迷うことなく歩く様は、きっとして格好いいなんて思つてしまつたけれど。

……やっぱり少し展開についていけません。

ござなりですか（後書き）

## 紅茶ですか

2.

「わか」さんは、もひお酒を結構飲んでるから、お茶にしましょ  
うね

「誰もあなたとお茶に行くなんて言つてません」  
「！」あたりに紅茶専門店があるんですよ？知つていました？」

紅茶専門店？

どうして私が紅茶が好きだってことを知つてるの？

軽く眉間にしわが寄るのがわかつたけれど、それを止める手立てもなく。

そんな私を見下ろして、ふふふと得意げに笑うこの男の笑顔がちよつとだけ可愛かった。

いやいや、可愛いなんて思つちや駄目でしょ。

こは逃げる方向でっ！

「じうして知つているのかつて？……簡単ですよ。珍しいチューハイを注文していくでしょう？だからです」

ああ、なるほど。

確かに居酒屋で『紅茶チューハイ』なるものを頼んだ記憶がよみがえってきた。

紅茶好きには冒涜的なそれは、それでも試しに一度は飲んでおこうと興味本位で頼んだお酒だった。

……一度とは頼まないと思つけれども。

「珍しいからオーダーしても、本当の紅茶好きの人には受けがよ

くないんです。一口飲んで嫌な顔されるんですね。紅茶シロップを混ぜただけの、予想通りの味だつて。わかこさんほまさにその通りの顔をしてたんですね

本当に私を見ていたんだなあつて、妙な関心と得体のしれない不安が襲つてきた。

この人、どこまで私を見ていた（もしくは観察）んだろう。

「だから、紅茶がよほどお好きなんだなつて思つたんですよ」

ふんわりと柔らかい頬笑みを私に向けて、その人は迷いもなく歩いていく。

言われる通り、確かに私は紅茶が好き。

紅茶葉専門店にも欲しい茶葉のためなら入荷日を確認して買いに行くほどには。

だから夜の八時という時間帯に店が開いているとは思えないけれど、それでも専門店という言葉を聞いて試したくなつたのはもう病気の範囲かもしねりない。

「ほら、あそこですよ」

白く綺麗な指の先には、薦で覆われた英國調の店構えの、青銅できた看板がほのかな明かりに照らされて開店していくことをうかがわせた。

店の扉をあけると、重厚な木と暗い色合いの壁紙、そしてところどころに照らされた照明がまるで英國のパブ（喫茶室ではなく）の開店前の静かな空間に紛れ込んだかのような錯覚に陥つた。

「よい雰囲気のお店でしよう?」

「……はい。とても……落ち着きますね」

閉店間際なのは見て取れたけれど、その男はなじみの客のようだ、マスターにお願いするように「コクリと頷いてから奥まつた席まで私を連れて行った。

そして椅子を引いて私を座らせると、そのままマスターのもとに言つて何やら話しかんでいる。

その間、店内の装飾をゆっくりと見回して雰囲気を楽しんでいると、両手にケーキを乗せた皿を持った彼が帰ってきた。

「お好きだとここんですけど」

出されたケーキはタルトタタンとシフォンケーキ。

この男つてば、どこまで私の好みがわかつてこのだらうと疑いたくなるくらいつぼをついてきた。

「紅茶、選びましょうか」

「そうですね。……いえ、選んでいただけます?」

「えつ? 私が選ぶんですか?」このお店は種類も本当に豊富ですから、わかこさんが気に入っている茶葉もありますよ?」

「だからです。もしあなたが私の好きな茶葉を選んでたら……」「当たったら?」

「私のこと、教えてもいいですよ」

あんまりにも私のことを知り尽くしているような錯覚に陥つたものだから、ちよつといたずら心など、起こしてみた。わかるわけなんて絶対ない。

居酒屋で私を見ていたくらいこじや、当てるわけなんてないはず。

挑戦的にならないように気をつけながら彼のほうを見てみると、長い前髪に微妙に隠された目が、じつと何か言いたげに私を見てた。



## 名前ですか

3.

「わすがにそれはわかりませんよ。何か手掛けりを頃かな」と  
ヒサヒと體もたれに身體を預けて、その男は困ったように咳いた。  
でもね、困らじてるんですよ、私としたり。  
正解なんて、してほしくない。  
けれどなぜか正解するんじゃないかつて恐れてもいる。  
そのくらこの男に脅威を抱いているのかもしれない。

思い立つたことを口から言つたおかげで切り返しがつましくできなくて黙つていると、助け船を出すようにその男はこいつ言つた。

「じゃあ、必ずこのメニューの中から選んでください。そして、紅茶限定でお願いします」

そうして差し出されたメニュー表には、紅茶のほかに烏龍茶や緑茶のフレーバードライまであって、合計百種類くらいはあるござ  
ないだろ？

たしかにこれなら『紅茶限定』って言われるのもわかる。

「ところでわかこさん。わざわざから名前を呼んでくれないんです  
が、名刺、ちゃんと見ていただきましたよね」

「ええ。拝見しました」

「じゃあ名前を呼んでいただけますよね」

「いえ、それこれとは違うんじゃないですか？」

「私のほうとしてはこれから一生わかこさんと生きて行きますの

で、氏よつも名で呼んでほし」のですが

「いやいやいやいや、いつの間にそんな話に?...」

「ん? 今ですよ。ちやんと『漣』と呼んでくださいね」

呼べるかつての!

どうして有無を問わざりここまで連れてこられているのに……まあ、紅茶専門店でつられてるわけでもないけども……そのナンパ男の名前何て呼ばないといけないのかな?

「嫌です」

「そんな即答しなくても」

「いやここは即答で! それになんで一生なんですか?」

「それは私とわか」さんとがこの後ようしなつて結婚するからでしゅう?」

よりしなつて……ってなんになるのかな? なるわけないしつ! その上結婚話なんてしてんじやないわよ。

無邪氣にほほほほほほ笑んでる田の前の男をびびやつたらやつさめることができるのか。

腹の中がぐつぐつ煮えたぎりてくる田の怒りが湧いてきた。見た目がいい男なのは見とけるけれど、だからつてこの暴挙はいったいなんだ?

優しそうな顔をして、やつてることがえげつなくないですかーつ?

「どれにするか決めました?」

「……なんか、私が言ったこととかよつと趣が違つてなくないですか?」

「そうですか? あつてこますよ。私が選んだのとわかさんと選んだのが合えば、あなたは私にいろんなことを教えてくれるのでし

よつ？楽しみです」

なんか違つくないですかつ！？

下手にこれ以上突つ込むと、また言葉尻をとられて自分の都合のいいほうに持つて行かれそうなので、口をざめうとつぐんでメニュー表を目で追つた。

あー、ほんとうにいろんな種類があるなあ。

ストレートが好きな私はあまりフレーバードティを好まない。

茶葉に付けられた臭いが強すぎて、紅茶の素の味が無くなつていつよいに思うからだ。

一度海外の茶葉専門店の紅茶を缶で購入したことがあるけれど、あまりに匂いがきつくて飲んでいくうちにふらふらしたことがある。もちろん例外もある。

アールグレイはフレーバードティの中でも大好きなもので、よくアイスにして飲んでいるし、ホットでもストレートに飲む後にミルクを入れて味をマイルドにする定番も好き。

けれど今はその大好きなアールグレイよりも田を引く茶葉を見つけてしまった。

珍しいその茶葉は、時期があつて、今はそのときじゃない。

それが表記されているということはよほど仕入れをきつちりしているんだろうなって感心してしまった。

うん。この紅茶にしよう。

オーダーする紅茶を決めたものの、まだまだメニューには飲んだことのないお茶や見たことのない組み合わせのお茶もあって、メニューを見ているだけで紅茶を楽しんでいるよつた気分になつて嬉しくなつてきた。

それにさつとメニューを見流して紅茶を決めただなんて、思われたくもなかつたし。

少しは知恵を働かしたつもりで、時間においてメニュー表を閉じた。

「決めました」

「はい。そのようですね」

相変わらずに「ここ」と笑っている彼に、気持ちだけでメニュー表をぶつけた。

なんでそんなに余裕があるのか、まったくもつて理解できない。

焦げ茶色の革表紙のメニュー表をぱたんと勢い良く閉じて、そのひと男は嬉しそうに微笑んでいた。

「わへ、どうやって答えを合わしますか？」

「お互ひ、このナフキンに答えを書くといつのはどうですか？」

そういってテーブルサイドにあるスタンドからナフキンを一枚取り出すと、一枚を自分に、もう一枚を彼の前に差し出した。  
鞄からペンケースを取り出して、ボールペンも添えた。

「わか」さんって、長女ですか？」

「え？……えーっと、それはゲームの賞品対象物件なので、お答えできません」

「それは残念です」

答え合わせの前から何を言い出すんだと思つたら、それは単純に私の鞄が重たそだからという理由だったそうだ。

一概には言えないのだろうけれど、長子は鞄の中になんでも詰め込むそうで、私が鞄からペンケースを出したことや鞄の容量からみて私が長女じやないかと思つたみたい。

正解ですけれど。

やつぱつこの人、見るとこりが人とは違つよつたな気がする。

「じゃあ答えを書きましょうか」

「私がら」と言つてボールペンに手を伸ばすと、私に見ないよう指示をしてからカリカリと文字をひつかく音が聞こえてきた。その音に迷いがない。

「わかれさん、どうや」

すいと差し出されたボールペンに、ほのかに温もりが感じられた。  
……そんなこと今まで思つたこともないのに。

微妙に意識しているんだなと自分に苦笑しながら、やつぱり私も書いているところを見ないようとにかくそれをしてからナフキンに答えを書いた。

「じゃあ『せーの』で」

「はい」

「『せーの』」

『 sakura  
『 sakura』

テーブルの真ん中にとんと置かれた一枚のナフキンには、予想通り同じ茶葉の名前が記されていた。

『 sakura』の名の通り、それは桜の葉をたっぷりと使って作られた、桜の香りがやわらかい春の紅茶。

以前勤めていた会社の近所の紅茶専門店で初めて出会ったときは、これほどまろやかな紅茶に出会つたことはないと驚いたものだった。

「……どうしてわかりました?」

やつぱりわかってしまうのかと思いつつ、それでも驚きを隠せず、彼を見ると、逆に自分が当てたことに至極驚いたように引き気味

になつたかと思つと両方のナフキンを見比べてほつとしたよつと息を吐いていた。

「まぐれですよ」

「うそ」

「うそじやないですよ。……そうですね、強いて言えば口元、か

な

口元?!

どうして口元で私の好みがばれたというの?

視線を固定するとわかつてしまふかもしぬないと思つて、お茶を決めてからもメニューをあけひら見ていたのに。

「まず視線でだいたいがわかりますよね。上下左右、どちらのメニュー表をみているかとかは。けれど何回か目線が固定されたときに、一回だけ、口の端が少し持ち上がったんですよ。それをみて、お気に入りがあつたんだって思つたんです。違いましたか?」

「うわあ、信じられない。

この人の観察眼つていつのがあり得ないと思つ。

「あとは……する」と思つんですが、先にケーキを持つてきまし  
たからね

「ケーキ?」

「そう、ケーキ。これつて重要なポイントだと思つんです。タルトタタンとシフォンケーキ。目線のところにあつた茶葉で、このどちらかのケーキに合いそうなのを選びました。sakuraなら、まるやかですかからシフォンケーキに合いますし。逆にタルトタタンならアールグレイかなつて思つていました。ただ、その目線の先にはアールグレイはありませんから

別に得意げに披露するわけでもなく、自分が感じたとおりの事実を淡々と話しているだけだとわかる。

正直、引く。

ちょっととしたじぐさで何もかも見透かされるんじゃないかといふ不安が付きまとつけれど。

けれど、面白い。

面白すぎる。

「面白い、ですね」

だから素直にそう言つたら、彼はきょとんとして「そんな風に言われたことはないです」とわかるかわからないか程度の小声でつぶやいた。

## プロポーズですか（前書き）

お気に入り登録が100件を越えていましたー！

嬉しそうでどうしていいかわからないほどです（^-^）

読んでくださっている皆様、本当にありがとうございますー！

これからも努力してこきますのでよろしくお願い申し上げます^ ^

## プロポーズですか

5.

照れているのか少し顔を伏せたその人は、それでもゲームに勝つて得た権利行使しようとしてか、机の上に肘をついて私との距離を縮めてきた。

「お茶を注文してませんでしたね。やはり『sakura』にしますか？」

身構えていた分ちょっとだけ拍子抜けして、それでもこの季節に『sakura』を飲める喜びのほうが勝ってしまって嬉しさのあまり顔がにやけるのを止められなかつた。

「本当にお好きなんですね」

「はい。時期的に無理だと思つてお茶だったのでも、まさか飲めるなんて思わなくて。私はやはり『sakura』をお願いします」

「そんなに喜んでいただいて、ここに案内した甲斐があります。じゃあ俺は『ディクサム』を」

話の腰を折ることなく現れたマスターに注文をすると、一人でまたケーキを挟んで向かい合つた。

改めて彼を見ると、やはりこの人は不思議なほど優雅でやわらかそうな雰囲気で、居酒屋のあの活気に満ちた場所で仕事をしている人には全く見えない。

『統括本部』って書いてあったから、居酒屋での仕事ではなく、オフィスでの事務仕事なんだろうけれど。

でもそろそろすると、なぜあの時にあの店にいたのか説明が付かないような気もする。単に視察とか？

「山木さんって、あの店で働いてるんですか？」

「漣、ですよ。わかこさん」

「山木さん」

「……まあ、今はいいですけれど。さつきの店にはたまたま顔を出しただけなんです。ちょうどそこにわかこさんと連れの方が入つてこちらなので長居をしてしまいましたが」

「？」

「店長と仕事抜きでも友人ですので、たまに顔を出すんですよ。で、さつきあの店にいたのはその『たま』だったわけです。まあ、今度は俺のターンですよ。

わかこさんのフルネームを漢字で教えてください」

『sakurा』と書いたナフキンとボールペンを差し出されて受け取ると、私の名前を漢字で書いた。

『八重野 環花子』

字数が多くて子供のころは苦手だった漢字は、大人になった今は結構気に入っている。

「綺麗な漢字ですね。花冠っていう意味ですか？」

「わかりやすいでしょう？ロマンチストの父が、母にプロポーズのときに指輪の代わりに花冠を編んでおくったんだそうです。それを母が甚く気に入つて、それで私が生まれたときに名付けたんだそうです」

「それは素敵ですね」

「はい。素敵なんです。だから私もそういうプロポーズしてくれる人と結婚しようつて小やこじるから思つてるんです」

うわあああつ。

私つたら何を言つてゐんだらう?

「人に『プロポーズするならこうこう風に』なんてリクエストしてゐみたいに話してゐ……よね?」

「それはいいことを聞きました。では俺がプロポーズする時はお義父さんよりももっとロマンチックにプロポーズを演出しますね」

「いやいやいやいや。別に山木さんにそうしろなんては言つていですから」

「いいえ? 十分にそう聞こえましたよ? 大丈夫。俺は約束を守る男ですから」

嬉しそうにこいつと笑いながら、水面下では手が伸びて私の手を包んでいますけれど!?

いつの間に??

「おや。漣君は結婚が決まったのかい?」

声のするほうに顔を向けると、マスターがポツトとカップを乗せたトレイを持つて立っていた。

「それはおめでとう」

「ありがとうございます」

ちょっと待つて!

今のはじめていきなり結婚が決まるつていう方向に?  
それに山木さんもお礼を言つなんて、おかしいでしょ。

「違いますよ? 私の両親の話ですから」

「それは失礼しました。早合点だったようです」

丁寧に挨拶をされて、マスターはカタリと小さな音とともに茶器をテーブルにセットした。

和菓子を食べているような感覚におちこる『sakura』の匂いが鼻孔をくすぐる。

山木さんが頼んだ『ディクサム』もちょっとは気になるけれど、でもやはりこの気持ちがあるくなる『sakura』をゆっくりと味わえるのは至福かも。

「わあ、どうぞ」

「ありがとうございます」

慣れた手で紅茶を淹れてくれたので、お返しに私も彼の紅茶のポットを持つてゆっくりとカップに注いだ。

決して濃くはない液体が、温められたカップに満ちていく。紅茶好きの人とこうやってお茶を楽しむなんてめったにないことなので、ここには無理やり連れてこられたことを少し忘れて、ゆっくりお茶を楽しもうと思つた。

田を開じて紅茶を一口、口の中ひくつかむと、なぜか舌先でじりじりと転がした。  
柔らかな甘い紅茶がさらじまろやかに感じるのはなるから不思議。

普通、紅茶を転がすようになんて飲まない。

そりやあ少しばし口に入れてからじどめるよには飲むけれど、舌先でそのままやかな食感を楽しむのは『sakura』でしかしたことがない。

ちょっと変わったことねって、直観はある。

初めて一口を開能し終わって田を開けると、ほおのと感嘆の息を吐いた。

するとカッピ越しに山木さんがさきほどまでのやわらかな頬笑みなんていこへいったのか、顔と身体を硬直させて私をじいつと見つめていた。

「……環花子さんは……」

「なんでしょう?」

「環花子さんは……いえ。紅茶を本当に美味しいにお飲みになられますね」

まるで呪縛から解かれたように身体に圧し掛かっていた力がふつと取れたのか、一瞬下を向いたかと思うと、ゆっくりと顔を上げるところにはじからが嬉しくなるほど笑顔を向けてきた。

どうしよう。

ここに珍しい人がいる。

大抵の男の人は、私と喫茶店に入ると間を持て余すか、もしくは私の苦みをつぶしたような顔を見てリラックスできないと言う人が多い。

それは私が喫茶店で出される紅茶といつものに美味しさをあまり感じたことがないせいだと思つ。

それでも『今回こそは』と思つてオーダーして、出された紅茶にがっかりする、それを繰り返しているせいいかきれ顔で見られる事が多かったし、実際いい加減にしるとまで言われたこともある。

それなのに田の前の人とは、初めこそなぜか硬直したものの、私と同席しても嫌な顔をするどころか微笑んでくれている。

こんなに楽しく紅茶を飲むのは、久しぶりかもしれない。  
出会い系方はナンだけど。

「だつて本当に美味しいんですよ？もちろん山木さんがオーダーされた紅茶も美味しいと思います。……飲まないんですか？せつかくの紅茶が冷めてしまします」

「いえ。あまりにも環花子さんが嬉しそうに紅茶を含んだものですから、ちょっと見惚れてしまいました」

「見惚れ……？」

「ええ。ワインのテイスティングでもしているんじゃないかと思うくらいに口でゆっくりと転がしていただけ？転がすたびに顔が緩んでそれはそれは美味しいそうでしたよ。こちらが欲したくなるくらいに」

その言葉に載せられた意味に驚いて田を見張ると、驚くほど間近に迫っていた山木さんのけぶつて色濃くなつた瞳とぶつかつた。  
明らかな挑発。

さすが有無を言わねえ！」まで連れてくるだけはあるなって思つてしまつた。

軽く抗議の意味を込めて不作法にならない程度に音をたててカップをソーサーに戻した。

「お飲みになれます？美味しいですよ、『sakurā』は」「これは……返されましたね。でもまあいいでしょ」

自分のカップを持ち上げると、少し冷めた紅茶を飲みほした。

「といひで名の漢字は判りましたが、連絡先の交換をお願いします」

「え？ だつて私、名前を教えましたよ？ それでゲームの賞品はおしまいです」

「環花子さんは『私のことを教える』とおっしゃいましたよ？ それは名前だけじゃなくてそのほかのことも付随すると思いますが？」

「私のこと……ええ、確かにそういう言いましたけれど。でも山木さんの言葉の逆もありでしょう？ 私はちやんと私の名前を教えましたし」

「“じうともとれる言ひ方をしたのが失敗だとあきらめて、私に連絡先を教えてくださいね。赤外線、使います？”

私の言ひことはスルーですか？！  
というか、私の失敗扱い？

「環花子さん。携帯電話を出してください。プロフィール交換しましょう」

「なんだか山木さんつて、慣れてません？」

もしかしてしおつかずのこんな風に誰かを微妙に拉致つていると

か？

だから妙に落ち着いていて、切り返しがうまいんじや？  
私、プロフィール交換しても、大丈夫なんでしょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3261ba/>

---

そんなのありますか？

2012年1月14日15時49分発行